

1. (2) 外国語活動・英語科 後期課程 第8学年における実践

自己を省察し、豊かな英語表現力を育む授業を構築する

ー英語でのコミュニケーションを通して将来を展望し、自分の思いを伝える（第8学年）ー



AI が人の仕事を奪うと言われている未来社会。子供たちは、英語でのコミュニケーションによって、「人」ができることから「自分」ができることへと考えを深めていく。自身の興味・関心と合わせながら将来を展望し、思いや考えを伝え合う授業。

1. 学びの構想

はじめに

令和3年度は、中学校における新学習指導要領実施1年目の年であり、本校が採用している教科書 NEW HORIZON ENGLISH COURSE においても、指導事項および内容が大きくリニューアルされた。本校の英語科では、以前から教科書における題材との出会いを大切にしているため、学習指導要領の改訂にともなう教科書の改訂は、日々の授業実践のみならず、カリキュラム全体にも大きな変化をもたらす。そこで、今年度は、ともにスタートした GIGA スクール構想によって配付された一人一台のタブレット端末を活用しながら、新カリキュラムをつくっていくための挑戦的な取組をしたいという思いのもと、授業構想に着手した。

(1) AI と職業の関係に興味をもち、未来社会を想像する

自分の将来像や夢に関する題材は、あらゆる教科・領域で扱われ、英語科においてもほかではない。昨年度までのカリキュラムにおいては、5年生で将来の夢について伝え合い、8年生で職場体験を題材とする文章の読解を通して、さらに自分の将来に関する思いや考えを具体的に表現した。そして、9年生では、AI が活躍する未来社会を想像し、ディベートやディスカッションという活動形態によって、社会的事象に対する意見を伝え合ってきた。

8年生の新教科書では、AI による未来社会の変化と職業との関係が題材となっており、初めて目を通したときには、昨年度までの8年生と9年生の2つの内容が合わさっているような印象を受けた。中学2年生という発達段階にいる子供たち

が、AI が活躍する未来社会についてどれほどの知識（スキーマ）があるのか、そもそもコミュニケーション活動につながるような興味関心はあるのか、様々な疑問が浮かんでいた。一方、全国的にも中学2年生で職場体験を実施している学校が多い中、本校の子供たちはその経験がない。そこで、まずは将来に関する簡単な英語アンケートを実施・共有し、子供たちの中から将来の夢として実際に挙げた職業から、AI が活躍する未来社会へと話題を広げていくことにした。

(2) 仲間とのコミュニケーションを通して、自己や他者の将来に対する思いや考えを伝える

教師になってまだ2年目の6月、福井地区の研究授業を担当する機会があり、そのときも中学校2年生の将来の夢に関する単元で行った。不定詞（to+動詞の原形）が新出の言語材料であるため、“I want to …”という表現を使って将来の夢について伝え合うことが主な活動であったが、私たちが授業の中で最も提案したかった点は、将来の夢がなかったり、考え中だったりする子供たちに対する教師側からのアプローチであった。以来、この教科書単元における授業を構想する際には、中学校2年生の発達段階における子供たちが、仲間や教師とのコミュニケーションを通して将来を展望し、自分の言葉（英語）でありのままの思いや考えを表現することを重視している。

子供たちが、内容面と表現面の両方を達成するためには、今の自分を見つめ、捉える機会が不可欠であると考えている。自分は何ができるのか、何が得意なのか、さらに、どんなことが好きなのか、何に興味をもっているのかなど、子供たちと

様々な問いを共有しながら、自己の可能性を感じ取っていただけるような授業にしたい。それらの問いに対して感じた思いや考えが、自己表現の種として本当に伝えたいことにつながっていくのだと考えるからだ。なお、本実践では、子供たちの自己省察や自己表現を促進するものとして、積極的に ICT (Google Jam board) を活用する。一人一人が自分に関する情報が並ぶ My sheet を作成し、それを使ってコミュニケーション活動を展開していく。

2. 学びのストーリー

Part 1: Let's think! Future and AI ～未来と AI について考えよう～

(1) Do you have a dream? (第 1・2 時)

“Open your タブレット端末 and take this QR code. I want you to answer some questions.” (タブレット端末開いて、この QR コードを読み取って。まずは、みんなに質問に答えてほしいんだ。) 教師からの指示が出るや否や、子供たちは自身のタブレットで黒板に貼ってある QR コードを読み取り、教師が Google Form を使って作成した将来に関するアンケートに答えていった。

Q1. Do you want to go to high school?	
Yes, I do.	94.7%
No, I don't.	13.2%
Q2. Do you want to go to university?	
Yes, I do.	92.1%
No, I don't.	15.8%
Q3. Do you want to work in the future?	
Yes, I do.	78.9%
No, I don't.	26.3%
Q4. Do you have a dream?	
Yes, I do.	47.4%
No, I don't.	57.9%
Q5. If you answered "yes", what do you want to be in the future?	
Q6. Do you want to live in Fukui?	
Yes, I do.	39.5%
No, I don't.	65.8%

資料1 子供たちのアンケート結果

子供たちの回答が出そろったところで、アンケートの結果を共有することにした。(資料1) その場で可視化できるところが、Google Form の優れている点である。画面をスクロールしながら一

つずつ見ていく中、子供たちが最も大きな関心を寄せたのは、将来の夢に関する問4のアンケート結果だった。クラスのほとんどが、高校や大学に進学したいと思っている一方で、将来の夢をもっている子供は半分以下だった。その結果に、教室のあちらこちらから「少ない!」という驚きの声が聞かれた。そして、問5の答えとしてどのような職業が挙げられているのかを確認した。

将来の夢として最も多かった職業は医師で3人の子供がそう答えた。前回の授業では、スモールトークとして ALT が投げかけた質問がたまたま将来の夢に関するものであり、そのとき指名された恵は “I want to be a doctor because my mother is a nurse.” と答えていた。教師はそれを思い出し、“What does Megumi want to be? Do you remember?” とクラス全体に問いかけた。すると、何人かの子供たちが勢いよく “Doctor!” と答えた。さらに教師は “Why does she want to be a doctor?” と質問したが反応がなかったので、恵にもう一度問いかけ、“Because my mother is a nurse.” と “To help sick people.” という2つの英文を並べて板書した。それを見た子供たちは、「お母さんがナースって言ってたっけ…」と思いついた様子だった。一方、教師がチョークの色を変えて示した “Because” や “To” の言語材料はクラスの話題には挙がらず、そのまま教科書を開き、新たな単元に入った。

教師: What's the title of Unit 3?

子供: My Future Job.

教師: Yes. Do you know Career Day?

子供: 何それ?

幸太: あ、なんか中2で行くやつじゃない? 職業何とかっていう・・・

教師: Oh, you know. We call it “職場体験”.

教師は福井市の公立中学校では、中学2年生になると3日間から1週間程度の職場体験があることを伝えた。そして子供たちに職場体験をしてみたいかとたずねると、「え～嫌だな」「楽しそう」「マクドナルドで働きたいな!」など、様々な反応が返ってきた。そのような中、次郎は All English で進んでいく教師と子供とのやり取りについていけず、しきりに「なんて言っているんや?」と席が後ろの幸太に助けを求めていた。英語の理解力が高い幸太は、次郎をサポートしていた。その姿を見て、教師は、子供たちや教師が発話した英語表現をできるだけ黒板やスクリーンに可視化させなければならないと反省した。

第2時は、アンケートの中にあった“Do you want to work in the future?”という問いについてペアでチャットをすることから始まった。共有のとき、最初に指名された花子は、教師の問いかけに“No, I don’t.”と答え、「何もしたくない」と小さな声で消極的な気持ちをつぶやいた。教師は全体に“How do you say「何もしたくない」 in English?”とたずねたが、反応がなかった。そこで、“I don’t want to do anything.”という英文を板書した。

その後、子供たちは新出表現や熟語など、読解のポイントが書き込まれたワークシートを頼りに、3人グループで Sight Translation（教科書本文の和訳）に取り組んだ。（資料2）本文を理解するためのシンプルな活動であったが、おそらく教師が「和訳」ではなく、「翻訳」という言葉を使って活動を説明したためか、子供たちはより自然な日本語で和訳しようとする姿も見られた。

久美：“It says some jobs will disappear in the future.”
この“it”は「新聞記事」のことを指しているんだから、“say”を「言う」と訳さない方が良くない？「何て書かれている？」とかの方が良いよね？

教師：とても自然な日本語になっているね。

幸太：“AI will take some translation jobs away.” “some”って書かれているから、全部じゃないってことだよよね？



資料2 3人組で活動に取り組む子供たち

教師は「AIが翻訳家の仕事のいくつかを奪うだろう」という教科書の英文を用い、自分たちが目指す仕事についてはどうか、次時への課題を示した。

（2）Which jobs will disappear?（第3時）

まず、過去に消えた仕事として、教師は「タイピスト」「エレベーターガール」「紙芝居屋」の3つの職業についてプレゼンテーションソフトを使って紹介した。子供たちは、なぜ、なくなってしまったのかをペアで予想し、それを英語で伝え合ってみるという活動に取り組んだ。ふだん、英語の授業に消極的な誠がこの日は意欲的に英語で対話していた。そこで教師は誠の意見を聞くところから全体共有を始めた。

教師： Why did typists disappear?

誠： Anyone can do it.

誠の口から出た英語表現が参考となり、次の「エレベーターガール」についても友也が“Because anyone can use it.”と答えた。さらに次郎は「防犯上でも安全になったから」と新たな意見を挙げたので、教師は“Oh, that’s right!”と大きく興味を示し、“You can say, ‘There are some cameras in it.’”と伝え、英文を板書した。紙芝居屋については、美紀が“Children became busy.”という意見を共有した。その発言には、「子供たちも忙しくなって、紙芝居を見る時間（余裕）がなくなった」という意味を含んでおり、子供たちは自分の生活に重ねて捉えたのか、大きくうなずいた。

ライフスタイルの変化によって、実際になくなる仕事があることを感じ取ったところで、話題はAIへと展開した。“Now, we have AI. What kind of AI do you know around us?”（私たちの身の回りには、どんなAIがある？）子供たちからは、Siriや翻訳機のほか、“medical equipment”（医療機器）という言葉も出てきた。そして、最後に花子を指名すると「レジ」とつぶやいた。

教師： Are they at Supermarkets?

花子： No. Uniqlo.

子供： ああ〜！カゴを置いてだけで何を買ったかわかるやつだ！

子供たちにとって、AIが生活のなかに浸透していることを強く実感する場面となった。そして、このような社会において、AIは今後どのような仕事を奪っていくのか、まずは「教師」という仕事に焦点を当て考えてみることにした。

教師: Do you think AI will take teacher's jobs away?"
 友也: I don't think AI will take teacher's jobs away because we need communication.
 幸太: I don't think AI will take teacher's jobs away because AI doesn't have emotion.
 教師: That's true.
 AI doesn't understand our feelings.

教師は咲にも意見を発表するように求めた。ペアでの対話の際、彼女は「どちらとも言えるんだよな...」と迷っていたからだ。

咲: I think AI will take teacher's jobs away.
 教師: Why do you think so?
 咲: Because AI teaches us at our cram school.
 子供: ああ〜。
 教師: There are many AI teachers around us. Do you like AI teachers?
 咲: No. 画面が一緒だとモチベーションが上がらない。
 教師: You think it's boring because the screen doesn't change.
 咲: Yes.

咲は自身の生活経験の中から理由を導き出し、自分の言葉で考えを伝えた。その日の振り返りには、美紀をはじめ多くの仲間の思考を深めたことが見て取れる。また、花子は“I think ~.”という表現を使って、自分の考えを相手に伝えることが苦手だと感じていた。（資料3）なお、本実践においての振り返りは、各自がタブレットから送信するようにしている。

先生は AI に奪われるかどうかで聞かれたら、今日みたいに迷うと思います。でも、肯定・否定両方の意見を英語で言えるようになります。（咲）

今日は AI について学びました。30 年前から今までになくなった仕事がいくつかあるというのが驚きでした。また、think や because を使った英語の文についても学びました。私は think を使うのが苦手なので頑張って身に付けていきたいです。（花子）

社会などで AI について学んだこともあったので、その内容の英語版みたいな感じで面白いです。でも、社会の内容を英語でっていうのはちょっと難しいのでこれから頑張りたいと思います。私の将来の夢は教師です。なので AI に奪われたくないです！教育ってやっぱり、人間の先生の方が楽しいし意欲も湧いてきます。（美紀）

資料3 授業後の振り返り

（3）Which jobs will stay?（第4時）

第4時はこれまでとは逆で、「将来、どの仕事が残るか」というトピック（課題）が示された。教科書の付録を使い、職業名を確認したあと、Google Form を使って子供たちのイメージが共有された。（資料4）子供たちが考えた AI によって奪われない職業の1位は“Athlete”だった。



資料4 タブレットで意見を入力する子供

教師: Many of you don't think AI will take Athlete's jobs away. I think so, too. AI robots can run or jump, but it's boring to see. It's not impressive.
 Do you agree with me?

教師が今の意見に賛成かとたずねると、半分以上の子供が手を挙げた。しかし、次郎は「でも、ロボコンとかあるよ」と反論した。次郎の発言（揺さぶり）は授業を動かすことが多い。教師はその意見を英語で伝え直し、反論の仕方を板書した。

その後、ペアでの意見交換をしたが、教師の指示がうまく届いておらず、相手の意見を聞くだけで、さらに英語で賛成したり、反対したりするところまで対話が発展しているペアはほとんどなかった。

教師は活動の指示を英語で与えることの難しさを感じながら、子供たちの言葉に耳を傾けていると、英語を苦手とする里香がペアの相手に“I don't think AI will take Athlete's jobs away because 「人だけができる」と伝え、教師に「人だけができる」は英語でどのように表せばよいのかとたずねてきた。教師は里香の意見と理由をクラス全体に共有し、“What can only people do?” という新たなトピック（課題）を即興的に投げかけてみた。すると、勢いよく日本語で話し出す子供たちの姿が見て取れたので、これはチャンスだと思い、その考えを英語にしてタブレットで送信するように指示した。その結果、

“People can”という子供たちの考えが 52 個集まった。以下はその一部である。（資料 5）

(People) have feelings. (咲)
Only people can encourage. (美紀)
Only people have warm feelings. (美紀)
Only people can considerate (think of) partners.
(美紀)
People can have (each) individuality. (花子)

資料 5 子供たちの意見（一部）

Part 2: Let's think: Future and “I” ～未来と「わたし」について考えよう～

（1）What can “I” do?（第 5 時）

前時に書いた “What can only people do?” の共有から始まった。子供たちは教師が印刷したワークシートを静かにじっくりと読み進めた。教師がその様子を見ていると、美紀が「先生、“Only people can make dramas.” っていうんだけど、ここにこう書いてありますよ」と英語のワークにあるコラムを見せてくれた。それは、いずれこの世に存在しない AI ロボットたちのドラマが誕生するという記事であり、スクリーンに映し出すと子供たちから「え～!」「気持ち悪い!」という大きな反応が返ってきた。あまりにリアルな顔立ちが衝撃的だった。

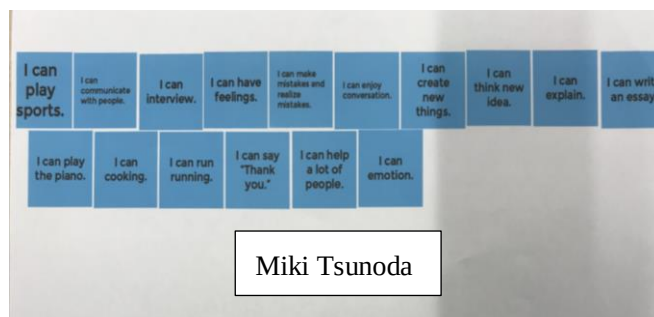
教師はこれまでの 4 時間のあゆみを黒板に描き表し、子供たちと振り返った。そして、おもむろに最前列の剛に “Are you AI?” と聞くと、驚いた様子で “No!” と答えた。

教師: We're not AI. We're also humans, so please change the questions “What can people do?” to “What can “I” do?” Let's think about yourself, Future and “I”.

教師はジェスチャーを付けて “yourself” や “I” を強調し、本実践における主題の共有を試みた。そして、「この単位では、最終的に一人一人になりたい姿や、やってみたいことなど、この先の自分について英語で表現することを目指そう」と日本語で付け加えた。子供たちは、教師の言葉に耳を傾けている様子だったが、主題が子供たちの追究したいものになっているとは思えなかった。子どもたちは、ワークシート上の “people” を頭の中で “I” に変換し、自分ができるといったことにチェックマークを付けていった。活動中、修一の

「俺ってできること少ないなあ」という声が教室に響いた。その後、子どもたちは Google Jam board に作った各自のシートに、自分ができるといったことを青色の付箋にタイプして貼った。美紀が考えた「自分ができるとこと（資料 6）」の中には、自身が考えた「人ができるとこと」（資料 5）の文は一つも重なっておらず、一つ一つの内容を自分に置き換えて吟味したことが推察された。

○主語が “I” 「わたし」 の場合



資料 6 美紀のシート

（2）What am “I” interested in?（第 6 時）

教科書本文には、登場人物の朝美が職場体験で翻訳会社を訪れ、そこで働く田中さんから以下のようなアドバイスをもらう場面がある。（資料 7）

“Sometimes we need general knowledge and specific knowledge. If you are interested in something, you should continue to learn about it. It can be your strength in the future.”

資料 7 教科書本文にあるメッセージ

そこで、本時も 3 人組で教科書本文の Sight Translation を行ったあと、新出表現の “I’m interested in ~.” や、既習表現の “I like to” を用いて「自分が興味をもっていること」について思考し、黄色の付箋を使って書き足した。

（3）What can “I” be in the future?

（第 7 時）

夏休み前、最後の活動を迎えた。ペアで互いのシートを見せ合い、「向いている仕事」について考え伝え合う活動を行った。「将来、何もしたくない」と話していた花子はペアである潤のシートを見ながら対話を始めた。（資料 8）

潤: What can I be in the future?

花子: I think you can be a ... math teacher!

潤: Why do you think so?

花子: Because you like math. だって勉強できるし、好きなんでしょ？
 教師: How about math teacher at university?
 You are interested in AI and languages.
 花子: 数学者！
 教師: Yes! Mathematician!

健太: Because you like cooking for your family, you can run, and you can think new ideas.
 美紀: Oh, I see. Thank you.

「走ることが」なぜ料理人につながるのかは疑問が残ったが、健太は複数の付箋の情報を組み合わせて美紀にアドバイスしていた。

その後、本来ならば将来の展望を書く活動で単元を終えることを構想していたが、教育実習期間に入ったこともあり、子供たちはMy Sheet を参考に実習生に自己紹介を行った。英語科の実習生が4人グループに1人入り、順番に即興でやり取りを行った。自己紹介は前期課程の外国語活動から何度も行っているが、自己を多角的に捉えたことにより、初対面の実習生と様々な話ができている様子が見られた。



資料8 潤(上)と花子(下)のシート

一方、美紀には教師になるという夢があるが、ペアの健太から次のようなアドバイスをもらった。(資料9)



資料9 美紀のシート

美紀: I want to be a teacher but what else can I be in the future?
 健太: I think ..., you can be a cook.
 美紀: Really? Why do you think so?

3. 省察

(1) 9年間を見通した主題(課題)設定の必要性

単元構想で述べたとおり、未来やAIを題材にした教科書単元は、3年生の秋頃に登場していたが、新教科書においては2年生の6月頃へと前倒しになった。美紀は「社会科などでAIについて学んだこともあったので、その内容の英語版みたいな感じで面白いです。でも、社会の内容を英語で(伝える)っていうのはちょっと難しいのでこれから頑張りたいと思います」と自身の学びを振り返っている。ここに、子供たちの思考と英語表現の間に隔たりを感じることが見て取れ、8年生の学習がはじまってそれほど経っていない子供たちにとっては、社会的なテーマに対して意見や理由を述べることは難易度が高く、ペアでのコミュニケーション活動によって思考や表現を深めていくことに無理があったと思う。そのため、ここまでの授業を振り返っても、全体的に教師対子供のやり取りが圧倒的に多く、子供同士の協働的な雰囲気を作り出すことはできていなかった。

「木を見て森を見ず」という言葉があるように、わたしは目の前の題材や活動にばかりに意識を傾けていたように思う。9年間の学びのなかで主題や課題設定を行えていなかったことが、子供主体の授業になりにくかった一要因だろう。今後は、子供たちの学習過程を俯瞰的に捉え、子供たちが取り組みたいと思える主題(課題)設定を心がけなければならない。

（２）「学びのストーリーを子どもと共に省察する」とは

一方、多くの子供たちが単元の振り返り（資料 10）により価値付けしてくれたのは、社会的テーマに対する考えを、難しくても、何とか伝えようとしたことにより、英語での意見や理由の伝え方がわかったということである。子供たちは、前単元で“I think (that) ... because ...”という表現方法を学び、本実践においてはトピック（課題）を少しずつ変えながら、何度も使う機会があった。同じ単元の中で、さらに単元を超えて何度も活用していくことにより、コミュニケーションのための重要表現が身につについていくことを子供たち自身が実感していることはとてもうれしい。さらに教師がすべきことは、思考や表現が困難だと感じる課題に対して積極的に英語を使おうとしている子供たちの姿をしっかりと見取り、即時的にフィードバックしていくことだと思う。教師のこのような行動が、子供たちの主体性を育むと考える。

また、「子どもと共に学びのストーリーを省察する」という研究副題においては、子供たちが内容面において価値を感じていたかということも重要である。教師であるわたしにとっては、英語を用いて自己省察したり、それをもとに将来を展望したりすることは、子供たちの人生においてとても有意義なことだと思っている。しかし、肝心な学習者である子供たちがそう思っていなければ、単元構想をし直し、再構築していかなければならないだろう。子供たちが、振り返りにどの程度本当の気持ちを書けたかはわからないが、将来の夢をもっていない子供たちにとっては、自分の将来像が見えなかったのではなく、見ようとしていなかったことに気づいたという意見が多かった。また、将来、実際に自分の職業を選ぶときにも、自分の興味やできることから選んでいくから参考になったというコメントもあった。多くの子供たちは、ふだんから、自分について考えているわけではないようである。このような子供たちにとっては、いったん立ち止まって自分を見つめ、さらに、AI が躍進するであろう未来において、自分はどうかしたいかということを英語で表現できた機会は、本単元の一番の成果であった。

（資料 10）

一方で明確な将来像がある子供たちにとっては、ペアで向いている仕事についてアドバイスし合うという活動にあまり価値を感じることができなかったのではないだろうか。ある子供が

書いた「（将来の夢については）人に言われて考えるものではない」という意見はとても貴重に感じられた。英語であっても、形式的なパターンプラクティスに陥らず、内容・表現ともに子供たちが英語でコミュニケーションする価値を感じられる活動につなげなければならない。

最後に「将来のことを考える機会にはなったが、自分の本当の夢を他人に言いたくないと思ってしまう。もし本当のことを言って笑われたりでもしたら自信をなくしてしまう」という振り返りにも注目しておきたい。これを読んだとき、わたしが見落としていた子供との大きなズレを感じた。それは、“I”「わたし」に関するトピック（課題）は、最も表現しやすいものかと思っていたが、自己表現の前に自己開示をしなければならず、それが障壁となる場合もあるということである。だからこそ、互いの思いや考えを受け入れ合える「探究するコミュニティ」をクラスの中に醸成し、子供たちの自律的な学びにつなげていく必要があるであろう。

【英語力について】

新しい表現を使って自分の将来の夢について文章を書いたりそれを誰かに話したりして、英語の力は身についたのではないかと思います。

【将来の自分について】

少しは考える機会になっていると思います。私は自分の将来の夢がなかったけれど、自分の得意なことや好きなことから自分に合う職業をアドバイスしてもらって、少しその職業に興味が湧いたからです。（花子）

【英語力について】

自分自身の意見を社会的に言うことで、わかりやすい意見の言い方で深く話せました。

【将来の自分について】

私は、もともと人と関わる教育的な仕事がしたくて、将来の夢について大体の形にはなっていました、具体的に「これ」といった仕事についてはあまり考えていませんでした。そこには、『本当に自分に合った仕事なのか』『人間だけしかできないこと、将来 AI に奪われたりすることはないか』など、不安を感じていました。AI の将来についての知識もあまりなくて、うまく考えることができなかった中、この単元では「AI により将来なくなるかもしれない仕事」などを重点的に学んだので、教師の仕事は AI と違い子供に楽しく学習できることを知ったことから、大体の夢が定まってきました。

（美紀）

資料 10 単元の振り返り

（兼井 智加）